

論文の内容の要旨

論文題目： 現代中国語“给”の文法機能
——動詞の直前および動詞の直後に共起する“给”の意味と機能——

氏名： 神 谷 智 幸

本研究の目的は、現代中国語において、動詞の直前および動詞の直後に共起する“给[gěi]”の文法機能を明らかにすることである（「現代中国語」は、現在中国大陆で使用されている共通語——“普通话 [pǔtōnghuà]”を指す）。現代中国語において、“给”は授与動詞、事物の受領者を導く前置詞、行為の受益者を導く前置詞として機能することが知られている。本研究で取り上げる、動詞の直前および動詞の直後に共起する“给”に関しては、規範的な辞書や文法書に記載があり、広く認められている用法だと言えるが、これらの用法には、先行研究において、今なお見解が一致していない問題がいくつかある。本研究は、従来とは異なる観点から記述・分析することによって問題の解決を図るとともに、“给”の文法機能について独自の分析を提出する。以降、動詞の直前に共起する“给”を「给₁」、動詞の直後に共起する“给”を「给₂」と、便宜的に呼び分ける。

本研究は2部構成、全8章からなる。序章では、議論の前提となる主要な研究成果と重要な概念について整理しつつ述べ、各章で扱う問題を示した。

第1部（「给₁」の意味機能）では、第1章から第3章にかけて、“给₁”の使用実態の全貌を明らかにすべく考察を行なった。第1章（「非ヴォイス構文」における“给₁」）では、考察範囲を非ヴォイス構文に限定して“给₁”の基本的特徴を記述・分析し、以下の事

実を指摘した（e.g. “自行车他给拆了” [(その) 自転車は、彼が解体してくれた／解体してしまった]）。

① “给₁” を用いる文が未然の事態を表すか、已然の事態を表すかにより、動作主に立つ名詞（句）への制約が異なる。また、已然の事態を表す文における“给₁”は「恩恵」だけでなく、「非恩恵（不如意）」も表すことができる。② 已然の事態を表す文における“给₁”は、動作対象を主題化した「P+A+给 V」という語順を、その現れる典型的な構文環境としている。③ 話者の視点は「着点基準」に変化している。

以上の指摘を踏まえ、“给₁”に通底する意味機能を以下のように記述した。

“给₁”は「ある動作行為の実現により、話者（または話者がシンパシーを寄せる人）が恩恵を被る（未然）／恩恵を被ったか逆に不如意な思いをした（已然）」と話者が主観的に認定したことを表す。（第1章(35)）

未然の事態を表す文に“给₁”を用いるときは、これから起こるデキゴトとしてコントロールができるため、必ず「恩恵」を表す。しかし、已然の事態を表す文に“给₁”を用いるときは、結果からその事態を認定するため、「恩恵」だけでなく、「非恩恵（不如意）」にもなりえる。どちらの意味に傾くかは動詞（句）の語彙的意味や話者が事態の実現を願っているか否かにより、多義的になる場合もあることを述べた。

第2章（「有標ヴォイス構文における“给₁”」）では、考察範囲を拡げ、有標ヴォイス構文における“给₁”について考察を行なった。「執行使役文」における“给₁”（e.g. “我把杯子给打破了” [私は（その）コップを（こなごなに）割った]）の意味機能については、非ヴォイス構文と基本的に一致することを指摘した。また、“让”や“叫”と“给₁”が共起する例は、「執行使役文」、「受影文（受け身文）」の何れとも意味機能と異なっていることから、使役の機能をわずかに残す、中間的な「放任使役文」とした。「受影文（受け身文）」（特に“被”を用いる文、e.g. “我的手被蚊子给咬了” [私の手は蚊に噛まれた]）においては、通常、「非恩恵」を表すが、事態全体の生起を語る場合や直喩を表す場合は例外的になることを述べた。第2章で扱った有標ヴォイス構文においても、“给₁”は、「話者の主観的な認定」を表すと結論付けた。ただ、非ヴォイス構文、執行使役文においては、多義的な意味（「恩恵」「意外」「非恩恵」）を表すが、受影文（受け身文）は「非恩恵」のみを表すという点で、一義的に収斂していくと言える。また、構文の意味と制約によって、使役主の形式が異なること、動詞の意味特徴によって生起する構文形式が異なることを指摘し、このような違いが、“给₁”を用いる構文環境の分布にも関与することを述べた。

第3章（「給」の「虚化」）では、先行研究が方言類型論な観点から記述した「給」の文法化」を参照しつつ、共時的な用例を対象に“給₁”の「虚化」（意味の希薄化）について考察を加えた。さらに、話者の視点が「着点基準」になっていると考えることによって、ある特定の環境において「消失」・「損失」（“忘 [忘れる]” など）を表す動詞が多く見られるという現象について、合理的に説明することができることを示した。「虚化」の程度が高い「話者の主観的な認定」を表す“給₁”の意味機能においても、依然として“給”の授与義は保持されているという解釈を提出し、新たに「（授受）補助動詞」という品詞を認定することを提案した上で、共時的に見た、動詞、前置詞、“給₁”の虚化の段階を図に示した。

本研究の分析結果は、従来の説と異なり、動詞“給”の授与義との繋がりを明らかにしたという点に基づいて、“給₁”の種々の意味機能を包括的に説明することが可能である。

第2部（「給₂」の意味機能）では、第4章から第6章にかけて、従来、語彙的意味から分析されてきた“V 給₂”について、新たに構文論的、語用論的観点から考察を行なった。

「授与義動詞」と「授与義動詞＋“給₂”」（e.g. “我送他一双鞋”と“我送给他一双鞋”[私が彼に靴を1足贈る]）の両形式について、先行研究は意味的・機能的な違いを認めない立場と、意味的・機能的な違いを（何らかレベルで）認めるという立場に分かれている。第4章（「授与義動詞＋“給₂”を用いる構造の意味と制約」）では、この問題に対して、新たな視点から解決を試みた。本研究は、“送 [贈る]”を対象として、動詞単独の“送”と、直後に“給₂”が共起した“送给₂”が用いられる以下の4つの構造について、コーパス調査およびその分析により、“送”と“送给₂”の機能差の増減に関わる要因を明らかにした。

A 型：“送＋ヒト（間接目的語）” B 型：“送＋ヒト＋モノ（直接目的語）”

C 型：“送给₂＋ヒト” D 型：“送给₂＋ヒト＋モノ”

“送”と“送给₂”の相違点は次の3点にまとめられる。相違点 α ：“送＋ヒト”はヒトの定性が高く、受け取り手は人称代名詞に限定される、“送给₂＋ヒト”はモノの定性が高く、受け取り手への形式的な制限は無い。相違点 β ：“送给₂”の動作対象は、動作主の所有領域に属する事物でなくともよい（動作主は、動作対象を直接コントロールする能力があればよい）。相違点 γ ：“送给₂＋ヒト”は、結果性が明示され、限界性の付与が機能として加わる。C型においては、この相違点がすべて成立することからA型と明らかな差が見られる。しかし、D型の場合は、直接目的語が最後に立つ語順となり、相違点 α が成立しない。〈授与〉型の二重目的語構文の制約を受け、分布上はB型との差が見られなくなる。

第5章（「非授与義動詞＋“給₂”」の構文的特徴と意味機能）では、授受の意味の方向

性が抵触する行為（“买[買う] + 给₂”）、或いは事物の移動が生じない行為（“做[つくる] + 给₂”）のように、「授与」を表す“给”と結びつくことが難しいと指摘されてきた構造について、新たに構文環境やコンテキストを取り入れ考察した。

この種の“V 给₂”は、動詞と「授与」の意味的・時間的な結びつきが弱く、構文論的手段と語用論的手段を連携して用い、それらの支えによって成立することを明らかにした。構文論的手段としては、「非授与義動詞 + “给₂”」は、主に「名詞化」・「連体」・「使役」という3つの特定の構文環境に用いられることを述べた。語用論的手段としては、「非授与義動詞 + “给₂”」の動作対象（対格名詞句）は、コンテキストにおいて既知・既出の存在であり、また、情報伝達上、具体的行為（事物の入手方法）を言語化することが必要な状況であれば成立することを指摘した。

第6章（「“V 给₂”の分類」）では、従来の分類の問題点を挙げ、新たな分類基準によって、“给₂”と共起する“V”について分類を行なった。本研究は、「事象叙述」と「属性叙述」という概念を分類基準に据え、具体的には、事象叙述は、執行使役文に用いられるか否か、属性叙述（的環境）は、名詞化や連体修飾に用いられるか否かを判断基準として分類を行なった。分類の結果、“给₂”と共起する“V”は、「事物移動型」「事物授受型」「事物入手型」「行為実演型」の4種に分けられることが判明した。この動詞分類は本研究により新たに提唱したものである。各タイプの特性についても指摘した。

終章では、各章で行なった考察の結果をまとめ、今後の課題を述べた。さらに、第2部（第4章から第6章）の考察のまとめとして、現代中国語の文法体系における“V 给₂”の位置付けについても検討した。“V 给₂”における“V”は、意味特徴により認知的な「捉え方」（時間幅や関連性の細かさ）が異なるものの、「授与」行為を実現するための不可欠な具体的な前提的行為であると言え、すべて「連動構造」と認定し得るという結論に達した。その分析により、“V 给₂”を統一的に説明できるようになったと思われる。

本研究の考察の結果、“给”は動詞の直前および動詞の直後という統語的位置によって、文法機能と意味が大きく異なることが明らかとなった。また、考察の中で“给₁”と“给₂”は決して任意（optional）の成分ではないことを併せて指摘した。

最後に授与動詞、前置詞の機能と、“给₁”と“给₂”の繋がりについて、共時的に見た文法化（虚化）の段階という観点から図にまとめて示し、“给”の統括的な記述を行なった。